

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 48

関西大学博物館彙報
平成16年 3月31日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



青花宝相華文梅瓶 Blue Painted Pot

目次

吉田松陰「投夷書」との邂逅	2
イドゥートのマスタバ墓を修復するために	5
西インドの石窟遺跡踏査記(1)	7
真佐岐の竊	9
イギリス博物館訪問記 ―ヘイドリアン・ウォールを歩く―	11
体感の伝承～博物館での「茶」～	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171(直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

吉田松陰「投夷書」との邂逅

陶 徳 民

多くの発見は偶然の機会で出来たものと同様に、私と「投夷書」の出会いも一種の邂逅であった。

一昨年の秋、藪田貫教授・大谷渡教授と一緒にエール大学のスターリング記念図書館古文書部 (Manuscripts and Archives, Sterling Memorial Library, Yale University) で津田梅子の米国友人アリス・ペーコン関係史料を調査する時、ついでに『S. W. ウィリアムズ家文書』(Samuel Wells Williams Family Papers) を調べた。ペリー来航時の首席通訳官であったS. W. ウィリアムズ (1812-1884、中国名は衛三畏) が晩年、エール大で初代の中国学教授を務めていたことから、その家族文書がここに収蔵されているわけだ。初期の日米交渉では、東アジアの「ラテン語」である漢語による筆談や文書往復が行なわれていたという史実に興味を感じたので、もしかしたら、ウィリアムズが雇った中国人助手 (1853年は謝氏、1854年は羅森) の墨蹟がまだそこに残っているのではないかと推測したのである。

案の定、目的の資料を手に入れた。そのうえ年月順で整理されている Series I, Box 2 の Folder No. 46 から「甲寅三月廿二日」付の和文の「投夷書」別啓 (すなわち添え書き) が、Folder No. 47 から「日本嘉永七年甲寅三月八日」付の漢文の「投夷書」本書が出てきた。関連す

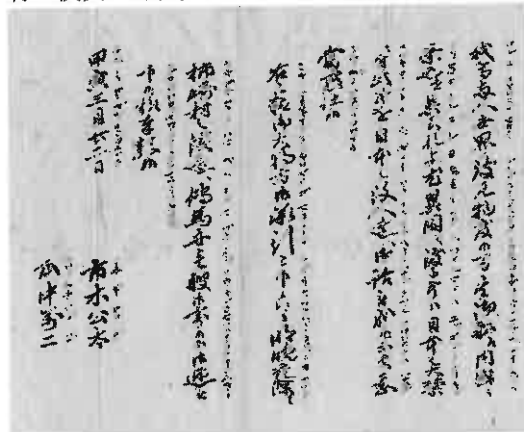
るカードに、前者について “A brief note by two Japanese, Isagi and Kwanouchi March 22, 1854” と、後者に関しては “Petition from two Japanese, Kwanouchi and Isagi, to American naval officials, asking permission to go abroad on American ship March 8, 1854” という説明文がタイプされている。

もっとも、書状自体には「投夷書」というタイトルはなく、海外脱出のために米国側に密航協力を求めた吉田松陰 (1830-1859) と従者の金子重輔 (1831-1855) は依頼書に「夷」という異人蔑視の表現を使うはずがなかった。その出典は松陰『回顧録』にあるようだが、しかし、その末尾に収録されている「投夷書」は漢文の本書と別啓だけで、和文の別啓はなかった。そして、ウィリアムズの『ペリー日本遠征随行記』、アメリカ議会の公式文書『ペリー提督日本遠征記』および下田の浜辺で松陰から「投夷書」を押し付けられた米国士官 J. W. スポルディングの『日本遠征記』など (以下では、「遠征関係三英書」と略す) には、いずれも漢文の本書と別啓に対するウィリアムズの英訳が載っているが、和文別啓の英訳はない。

では、この和文の別啓はいったい松陰のものであったろうか。

いろいろの関係書を探っているうちに、昭和五年平凡社出版の村松春水『下田に於ける吉田松陰』に、上記の和文別啓とはほぼ同文の「依頼書」がちゃんと入っているということに気づいた。その根拠は「幕末外交文書」と書かれていることから、それはおそらくは大正初期に編纂された『大日本古文書・幕末外国関係文書』だろうと思って調べてみたが、予想通りその中の第五巻にあった。

「三月二十九日下田出役浦賀奉行支配組与力等上申書」は、「柿崎村浜辺に罷越候処、異人三人上陸いたし居候二付、兼而兩人申合、外国へ渡海之儀相願度認置候書三通、異人互相渡し」と記した取調書および関連する七通の証拠文書を含んでおり、後者のなかに和文別啓のほか、



松陰の自筆と推定される「投夷書」の和文添書

「投夷書」本書や漢文別啓の横浜版と柿崎版も入っていた。これで、松陰の用意したものも、米国側に実際渡されたものも三種類だということとは確かめられるようになった。

さて、この和文の別啓は薄い和紙に書かれているものだが、松陰の自筆と判断したのは松陰の書の特徴がそこによく出ているからである。遠藤邦基教授によれば、このような片仮名のルビを施している幕末の文書は珍しいもので、漢字の多用もその特徴の一つだそうである。その意味で、音声上・表記上においてともに非常に個性的な本書には、ぜひともアメリカ側に理解してもらいたいという松陰の気持ちが滲みでていると言える。

なお、この和文別啓に、金子の偽名である市木公太の「市」という字のルビに書き損じが入っているため、「チ」は「サ」のように見える。それはまさに、「投夷書」の漢文本書に対するウィリアムズの英訳でその偽名中の苗字はIchigiではなく、Isagiとなっている原因だと思われる。このように見れば、ウィリアムズは和文別啓中のカタカナのルビが読めたけれども、その中の候文が読めなかった。だからこそ、「遠征関係三英書」にはその英訳がなかったわけである。

一方、漢文の本書は羅森の清書によるものと判断したのは、「中国人の筆ではないか」という京大人文研の佐々木克教授の示唆を受けてから、松前藩の役人松前勘解由と石塚官蔵に贈呈した羅森の署名がある扇面（現在、松前町郷土資料館と市立函館博物館にそれぞれ二面保存されている）や『S. W. ウィリアムズ家文書』中の羅森筆と見られる文書などの筆跡および用紙と比較をした結果である。この漢文本書の最大の特徴はなによりもまず、松陰はペリー側に表敬するための台頭の書式を使っていたことをリアルに伝えているということにあると言える。

ところで、去年の春、エール大学スターリング記念図書館古文書部を再訪する際、ウィリアムズの自筆日記、すなわち日本語に訳された『ペリー日本遠征随記』の原書の裏背表紙に貼りつけられている松陰の「第二の投夷書」を発見した。それは、下田・平滑の獄に監禁中の松陰がたまたま訪れてきた米側の外科医に渡した一

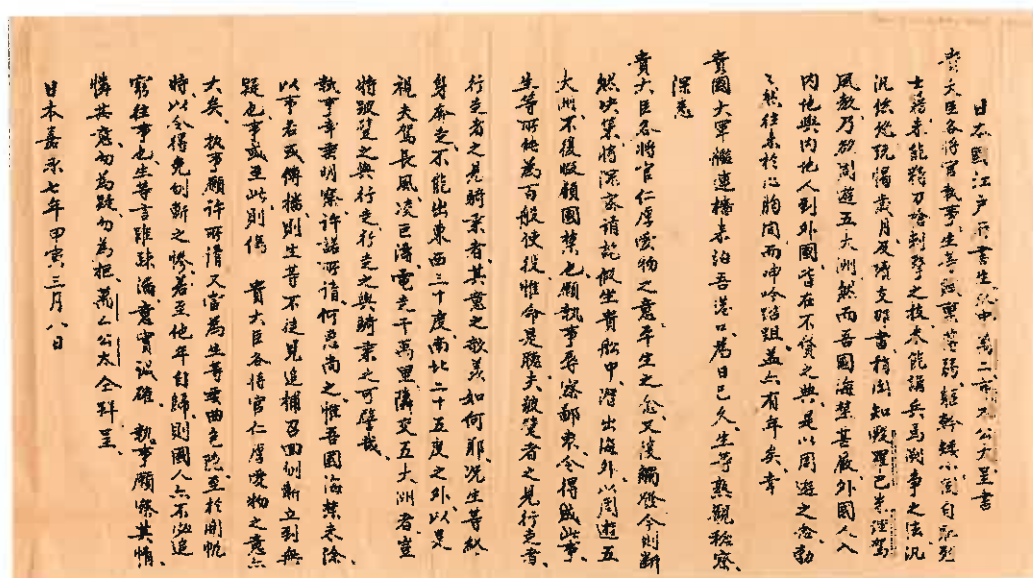
枚の板切れに書いてある漢文の写しである。その板切れ自体は現存していないが、その漢文の内容は、「遠征関係三英書」に載っているウィリアムズの英訳およびその英訳に対する徳富蘇峰以来の八種類の重訳によって知られている。

これらの英訳や日本語訳を事前に読んでいたので、ウィリアムズの自筆日記に貼りつけられている松陰の漢文はすなわちこれらの訳文の元に違いないとすぐ判断できたわけである。この漢文においても、密航前夜の「投夷書」と同じように「五大洲周遊」の強い意志を表明している。そのうえ密航に失敗して盗賊のような扱いを受けている悲惨な現状を嘆いている。筆跡から見て、これもやはりウィリアムズの中国人助手羅森による写しと推定できる。したがって、密航前の「投夷書」と区別するため、この監禁中の「投夷書」を「第二の投夷書」と名づけたわけである。

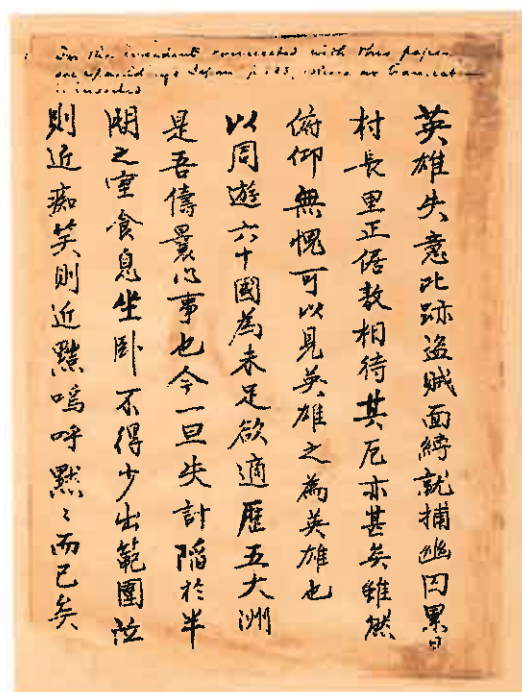
この漢文「原本」の発見によって、英訳や日本語訳に誤りがあることも分かった。〈面縛就捕〉の中の〈面縛〉とは、〈両手を後ろに縛り面を前に向ける〉という意味だが、ウィリアムズは〈公衆の面前で捕縛され〉という意味に英訳している。また、〈可以見英雄之為英雄也〉は、本来、既に自分を英雄視する松陰の豪邁な気概を示しているのに、〈今や英雄たりうるかどうか立証されるべき時〉と未来形で訳されている。

このような二、三の誤解があったにもかかわらず、当時、松陰の板切れを受け取った米艦側の対応は真剣そのものであった。ペリーは翌朝ウィリアムズと旗艦付副官を平滑の獄に向かわせた。その早朝すでに江戸に移送された松陰と金子には直接会えなかったものの、獄の管理人から二人の斬首の可能性を知ることができた。また、ウィリアムズの実測により、松陰と金子の二人が閉じ込められていたのは長さ約一・八メートル、幅〇・九メートル、高さ約一・四メートルという狭い檻だったことが確認された。その後、米側は松陰の処分に積極的に関与し始め、極刑はしないという幕府側の約束を取りつけたと、『ペリー提督日本遠征記』が記している。

では、監禁中の松陰に人道主義を示したペリー側は、なぜ、旗艦「ポーハタン」号の上で密航を求め、送還されたら首を切られるに違いな



羅森の清書と推定される「投夷書」



下田監禁中の松陰が心境をつづった漢文の写し

いと松陰の訴えを聞き入れなかったのだろうか。要するに、この密航事件は日米和親条約が1854年3月31日に調印されて一ヶ月未満の4月25日に起こった不測の事件であり、辛うじて日

本側の譲歩を引き出し条約締結に漕ぎ着けたベリ側は、不審の日本人密航者の受け入れで幕府との信頼関係を損なうことをできるだけ避けたいと考えていたからである。したがって、松陰の冒険精神と知的好奇心を高く評価し日本の鎖国制度を非難したにもかかわらず、ベリ側は最初、事勿れ主義を取ったわけであった。

このように見れば、松陰の密航事件の対処をめぐって、ベリ側は密航を拒否した国益優先の態度と、囚人の扱いで人権重視の姿勢という両面性を持ち合わせていることが分かる。昨年、イラクを占領した米軍当局は、わざわざ各国の記者団を招いて条件改善後のイラク監獄を見学させたという一幕があった。このイラク戦争にもつながる米外交の一貫したジレンマが150年前のこの松陰のケースにすでに読み取れるのである。

【関連論考】

「下田密航前後における松陰の西洋認識—米国に残る「投夷書」をめぐって—」『環』第13号、2003年5月；「下田獄における第二の「投夷書」—松陰の覚悟に対するベリ側の共感—」『環』第14号、2003年7月。

イドウトのマスタバ墓を修復するために

吹 田 浩

エジプトのマスタバ墓を修復するために調査することになった。エジプトの文化財の保存修復活動に関与するのは、私が1998年の秋から半年のあいだカイロ大学考古学部の保存修復学科に客員研究員として滞在して以来の念願であった。

今回の調査は、私のほかに西浦忠輝先生（東京文化財研究所）、本学の米田文孝先生（考古学）、さらにアフメド・シュエイブ先生（壁画保存）、アーデル・アカリシュ先生（化学分析）という日本とエジプトの合同チームによる研究である。

調査隊には、「日本・エジプト合同マスタバ・イドウト調査ミッション」という名をつけた。これは、日本が遺物を修復して終わるのではなく、エジプトと日本の専門家が長期にわたって交流をおこない、技術を共有すべきであるという思いからである。このような姿勢もあって、我がミッションは、エジプト側から「この種の活動のモデル・ケースである」と評価されている。

さて、調査の対象はイドウトという名前を持つ女性のマスタバ墓である。この女性は、古王国第五王朝最後の王ウニスの娘である。紀元前2360年ごろのことであるから、四千年以上も昔の人物とお墓を扱うことになる。

マスタバというのは、「ベンチ」を意味するアラビア語である。ベンチといっても、背もたれのない、ただ腰をかけるだけのものであり、お墓の形がこれに似ているためにマスタバ墓と呼ばれているのである。ピラミッドが王のための墓

であったのに対して、貴族などはこのようなマスタバ型のものをみずからのお墓としたのである。

彼女が生きた第五王朝というのは、一つ前の第四王朝があまりに偉大な時代であったために影が薄く、あまり知られていない。第四王朝は、クフ王、カフラー王、メンカウラー王がギザに三大ピラミッドを造営した王朝で、世界の誰しものが知っているであろう。実際に、クフ王のピラミッドは150mほどの高さがあり、見る者を驚嘆させる。これに対して、イドウトの父、ウニス王のピラミッドは、わずか40mの高さしかなく、現在では崩れて、とてもピラミッドのようには見えない状態になってしまっている。



石棺の蓋上で、断片を整理する米田教授



床を清掃中の濱君



イドウトのマスタバとジョゼルの階段ピラミッド

彼女のmastaba墓も、本来はイヒという人物のために作られたものである。彼の墓を暴力的に略奪したのか、あるいは、合意の上で譲り受けたのか、正確な経緯はわからない。また、彼女が早世してやむを得ない処置であった可能性もある。彼女の生涯は、彼女の墓の碑文からもほとんど情報をえることができない。いずれにせよ、王の娘に周到に準備されたお墓が用意できていないのである。彼女が生きたのは、かつての偉大で栄光に満ちた時代に比較して国力に陰りがでてきた時代であったろう。

それでも、このイドゥートと父ウニスの時代は偉大であった。ウニスのピラミッドは見てくれの悪さにもかかわらず、その内部には、大変に美しいピラミッド・テキストが残されている。これは最古のまとまった宗教文書であり、壁に丁寧に彫り込まれ、彩色されている。制作が丁寧であるのが古王国時代の特色であり、ウニス王の時代のあらゆる記念碑にあてはまる。彼のピラミッドの参道にそって、家臣たちのmastabaが整然と整備されており、それらは実に美しいレリーフで飾られている。新王国のラムセス2世の時代が帝国時代として物的豊かさを享受していたにもかかわらず、記念碑のつくりが雑であったのとは対照的である。

イドゥートのmastabaは、1927年に発見され、1935年にエジプト人の調査が行われ、立派な報告書が出されている。現在では、修復も十分に行われ、当時の姿を思い起こさせてくれる。

彼女のmastaba墓の背後に見えているのは、第三王朝ジョゼル王のピラミッドである。このピラミッドは、エジプトでも初めてのピラミッドであり、六段の階段状の形をしており、階段ピラミッドと呼ばれている。高さは、60mほどある。イドゥートの墓は、このジョゼル王のピラミッドの周壁の南に位置している。

今回の調査の地は、現在、サッカラと呼ばれている地域であるが、古代エジプト時代の墓域であった。古王国時代のものが中心となるとはいえ、初期王朝時代から末期時代まで、これほど多くの墓がバラエティーに富みながら密集している地域は他にはない。テーベ（現在のルクソール）の王家の谷でさえ、新王国時代のものにかざられるのである。

このイドゥートの墓には、地下12mほどのと

ころに埋葬室がある。実は、これが発掘以来、手つかずの状態にあり、今回の修復のために調査することになった箇所である。

この埋葬室には古王国の伝統ののっとって丁寧に描かれた、大変に美しい壁画が残されている。初めて見た時には、その美しさに驚いた。四千年前の絵が、当時の色合いをそのまま残しながら目の前にあったのである。絵の内容は、葬祭のための供物であり、脚を縛られた牛、鳥、パン、ビール、蜂蜜などが描写されている。

しかし、よく見てみると、すでに多くの壁のプラスターが落ちているばかりではなく、今まさに落ちようとしていることがわかって、大きなショックを受けることにもなった。このように美しい壁画が崩壊の危機に瀕しているのである。

そこで、今年の調査では、すでに落ちてしまっている壁画の断片のうち、大きなものを集めて、さらに壊れてしまわないように救出することにした。この作業には、本学の米田先生と院生・学生諸君の力をおかりすることになった。

実際の作業は、朝7時半にホテルを出て、8時すぎから午後1時までである。今回の調査は、ちょうどラマダーン（断食月）にかかってしまい、労働時間が通常より1時間短くなっている。したがって、一日に5時間弱しか仕事ができなかった。

それでも、埋葬室で数時間も作業していると息が苦しくなってくる。なにしろ、この埋葬室は5m×9mほどの広さしかなく、また、地下深くに、腰をかがめて入ることができる小さな入り口があるのみで、何人もの人間が活動すると空気が足りなくなってくるのである。

このような環境のもとでも、関西大学の考古学者の手際の良さは抜群で、次々と手早く地図をつくり、壁画の断片や、床に散らばるミイラの包帯を回収整理し、壁画の正確な写真を取ってゆく様子は、超人的ともいえるものであった。

さらに、このようなバイタリティーに溢れる活動は、日没後にも続く。これよりハン・ハリ（有名な土産物屋街）に突撃を敢行する、という指揮官の号令一下、考古学徒たちは、観光客を手ぐすね引いて待っている土産物屋に突入し、多大の戦果を得て、帰還したことは言うまでもない。

西インドの石窟遺跡踏査記 (1)

米 田 文 孝

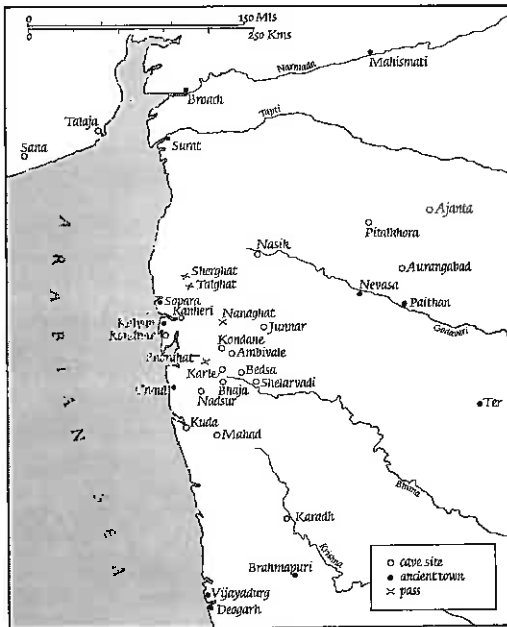
2003年8月6日～20日の間、文部科学省の科学研究費補助金（海外学術調査、2003年度～2005年度）の交付を受けて編成された調査団（研究課題「インド石窟寺院の美術史的研究」、研究代表者山岡泰造・関西大学文学部教授）の一員として、西インド地域に集中する仏教石窟寺院の調査研究に参加する機会を与えられた。初年度にあたる今年度の調査目的は、主要遺跡を可能な限り踏査して、その分布状況や石窟数をはじめとした基礎資料を作成するとともに、次年度に実測をはじめとした本格的な調査対象とする石窟遺跡を選定することにあった。

インドの石窟は、現在確認されている主要な遺跡だけでも総数1,200窟以上ある。ただし、広範な分布状況や遺跡の立地環境、交通機関の未整備などの諸問題から、必ずしも十分な分布調査がおこなわれてはいない。そのため、未だ確認されずに放置されている石窟が多いと想定できる。また、既知の石窟でもアジャンターや

エローラー石窟など、一部の国内外で関心度が高い著名な石窟遺跡（群）を除き、正確な窟数や各石窟の種類や規模・構造などの詳細は確認されていない現状にある。

さて、今回の踏査はインド最大の商業都市、貿易港であり、都市域だけで人口1,200万人以上が集中するマハーラーシュトラ州の州都ムンバイ市周辺の慢性的な渋滞を避けるため、近郊に宿舎をおいた。このムンバイは従来、ポルトガル語の良湾を意味するボン・バイヤに由来するボンベイとして知られていたが、近年は植民地時代の名称から原住民のコーリー漁民が崇拝していたパールヴァティー女神の化身、ムンバに因む古い地名であるムンバイに改称されつつある（1995年州政府改称、1997年日本政府正式呼称化）。遺跡（石窟）への往復はこの宿舎を起点に、四輪駆動車（クォリス）を借り上げて実施した。従来はビルラー系ヒンドゥスターン・モータース社のアンバサダー・辺倒であった乗用車も、近年ではトヨタ系のクォリスをはじめ、車種の多様化や性能向上が著しい。これも政府の自由化政策と規制緩和に歩調を合わせて、マツダ系マルティ・ウドヨグ社を代表に、日欧の自動車産業との合併事業が進展した結果であろう。

また、経済発展にともなう物流基幹として必要不可欠な高速道路の整備にともない、その事情も急速に改善されている。ムンバイからも、IT産業の発展が著しい南インドのカルナータカ州の州都バンガロールや、学研都市マイソール方面に、片側3車線の高速道路が約3年前に開通した。以前はムンバイがある海岸平野部から、名称の由来となっているガーツ地形、すなわち玄武岩質溶岩（デカン・トラップ）の水平構造に応じて形成された、階段状地形を示す急峻な西ガーツ山脈の断層崖から、石窟が分布するデカン高原（平均標高900m）上への移動は、困難と時間を要した。しかし、高速道路の開通で石窟への移動時間の短縮や疲労感の軽減などには、隔世の感がある。その反面、石窟へのア



第1図 西インド地域の主要石窟（Dehejia, 1972から）



図版1 カンヘーリー石窟（第3窟，チャイティア窟）の正面外観



図版2 カンヘーリー石窟（第3窟）前廊部の男女供養像



図版3 ナーシク石窟（第18窟，チャイティア窟）の正面外観

クセスが容易になったことから、今後は石窟の急速な荒廃が危惧される。

初期の石窟はマウリヤ朝のマガダ地方（現在のビハール州）周辺で出現・発展した。この時期の遺跡は、ガヤー近郊にあるバラール・ナーガルジュニ丘陵に残るアージーヴィカ教窟がある。やがて、石窟は東ガーツ山脈を海岸沿いに南下（例えば、オリッサ州ウダヤギリ・カンダギリ石窟群）して、半島南端部からシュリランカにまで、あるいはデカン高原全域から西ガーツ山脈をへて西海岸にまで拡散した。しかし、規模・数量的にも、西インド地域に開窟された石窟が優位を占めている。現状でみた場合、仏教窟が約75%を占め、ついでヒンドゥー教窟、ジャイナ教窟分などがつづく。

今回の調査は仏教石窟の調査に主眼をおき、



図版4 ナーシク石窟（第18窟）の内部

カンヘーリー石窟、コンディヴター石窟、ナーシク石窟、カールラー石窟、ベードサー石窟、バージャー石窟、ジュンナル石窟などを踏査した。次回以降、これらについて順次にその成果を紹介していこう。

【主要引用・参考文献】

辛島昇・前田専学ほか監修、1992、『南アジアを知る事典』、平凡社。

佐藤宗太郎、1985、『インド石窟寺院』、東京書籍。

宮治昭、1981、『インド美術史』、吉川弘文館。

Dehejia, V., 1972, "Early Buddhist Rock Temples" Thames & Hudson, London.

Fergusson, J. & Burgess, J., 1988, "The Cave Temples of India", Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., New Delhi.

真佐岐の蘊

黒田 一 充

延暦23年（804）に成立した伊勢神宮の『儀式帳』には、当時のさまざまな儀礼の様子が記されている。その中で、2月の最初の子の日に、御田植祭にあたる儀礼が行われた記述がある。内宮の『皇太神宮儀式帳』に「大神宮朝御饌夕御饌供奉御田種蒔下始」と記された、朝夕の神饌を作るための田に稲種をはじめて蒔く神事である。その際、禰宜・内人たちが湯（忌）鉾山に登って櫟の木を切って忌鉾を作り、それを持って御饌所へ行き、田を耕し始めた後、田耕歌や田儺が行われたという。

その際、禰宜・内人たちは「真佐岐ノ蘊為テ下来」とある。外宮の『止由気宮儀式帳』でも、同じ儀礼が行われていたことが記されており、こちらは「真佐岐ノ蘊為テ、自山下来テ」とあり、真佐岐の蘊をして山から下りてきたことを強調している。

カヅラはつる草などの植物を丸く束ねて、髪の上に被って飾りとするものであるが、具体的にどのような形態のものだったのかは、この記事だけではわからない。ところが、マサキのカヅラの例は、記紀神話にも登場する。

天の岩戸の場面で、アメノウズメが天香山のマサキをカヅラとして頭に被り、ヒカゲノカヅラを櫛にして踊ったという。『古事記』には「日影を手次に繋げて、天の真杵を縷と為て」、『日本書紀』には「真坂樹を以て髪にし、蘿を以て手縷にして」とある。多くの注釈書では、マサ

キはテイカカヅラの別名だとし、それを頭に巻いていたとする。

このように、神事で頭にカヅラを巻くことは、中世にも続いていたようである。紀伊国の日前国懸宮の『応永六年（1399）日前宮神事記』にも、正月16日に山で神木を切って忌鉾を作る御鉾山祭の記述があり、儀礼が行われる仮屋の中で、神主たちは頭の冠に木綿を結び、さらにその上に手須幾葛を掛けていたという。直接、頭にカヅラを被る姿ではなくなっている。

祭りの際に植物を髪飾りにすることは、京都の賀茂祭や稲荷祭・松尾祭で葵や桂の葉を烏帽子などに着けているのを見ることができるが、このようなカヅラを頭に被ることは、現在は非常に少なくなっている。ところが沖縄では、カーブイ（ハーブイ）やミチャブイと呼ばれる草で作った冠を各地の祭りで見ることができる。

沖縄本島の北部の地域では、旧七月の盆前後の亥の日を中心として、ウンジャミ（海神祭）とシヌグという祭りが行われる。ウンジャミでは、集落の背後の高台にあるアシャゲという屋根と柱だけの建物とその前の庭で儀礼を行った後、海岸まで下って海の彼方へ神を見送る。集落によっては、災厄の象徴であるネズミを海に流す儀礼が行われる。この祭りの儀礼は、女性の神人（神女）が中心となって進められるが、彼女たちは神衣装に鉢巻の姿で、さらに草の冠を着ける。今帰仁村古宇利島では、リュウキュ



写真1 古宇利島のウンジャミ



写真2 奥のシヌグ

ウボタンヅルの冠を被った神女たちが、アシャゲでの儀礼の後、海岸へ下りて、岩場の上でヌミという棒を持って櫓をこぐ真似をして神を見送る(写真1)。その後、カーブイと白衣装を脱いで、儀礼が終わる。

国頭村の北東海岸の安田や奥などでは、ウンジャミとシヌグが隔年に行われる。シヌグは、男性たちが集落周辺の山の上に登り、木の枝やつる草を切って山から下りてくる。安田では、山の中でつる草を身にまとしてから下りてくるが、奥では集落の西側の山から下りて来て、村の入り口で待ち受けている女性たちから浴衣などを受け取って着替え、ここでミーハンチャという赤い花とマムフで作った冠を被る。その後、木の枝を持って集落内を祓って廻り、東の海岸でつる草などを海に流す(写真2)。

村の入り口で受け取った浴衣は、昔は芭蕉布で作ったオナリ(姉妹)の衣装だったという。沖縄には、姉妹の霊力で男性が守られているというオナリ神信仰がある。その衣装を着て山から切ってきたカヅラを頭に被ることで、神に変身したことを表し、それを脱ぐことで人間に戻る。伊勢神宮の御田種時下の神事も、神の姿となって山を下りて、稲種を蒔くことが重要な儀礼だったと思われる。

ところが、沖縄以外にも、このようなカヅラ

を頭に被って儀礼を行う祭りがある。国東半島北部の大分県国見町竹田津の武多都神社では、旧暦11月初卯の日におちんで祭りが行われる。現在は、12月初めに行われる霜月祭りの前週の日曜日の午前中に行われているが、あらかじめ神社の裏山に生えているテイカカヅラを採って冠を2つ作っておく。冠の内側は、顔半分を隠すほどの深さがあり、周りに紙垂がつけられる。

拝殿の上でその冠を被った人は、笛や太鼓、鉦で神楽の音楽が演奏される中、両手に榊の小枝を持って、「やまとの舞はこうぞ、神こそ喜べ」と唱えながら、即興的に手足を動かして踊る。ふたりで拝殿の中を3周して踊り終え、その場にいる人の頭に冠を被せ、それを被らされた人は参拝者であっても踊らなければならない(写真3)。

この祭りの由来は、神無月で出雲に旅行をした神が、疲れていつまでも眠っているのを、霜月祭りを前にして村人が神を起こすための、神起こしの神事だという。しかし、これまで見てきたように、カヅラを被った人は、神になったと見なされていたことを考えると、神起こしではなく、神懸かりの所作を表す神降ろしの儀礼ではないだろうか。このような古い要素を残した祭りが、九州にもまだ残っている。



写真3 武多都神社のおちんで祭

イギリス博物館訪問記

——ヘイドリアンズ・ウォールを歩く——

文 珠 省 三

はじめに

この博物館訪問記は、平成14年度に大阪市の学芸員研修制度により2002年2月9日から3月12日までの32日間、イギリス各地の博物館を訪れたことによる記録の一部である。

2月10日にロンドンへ到着、そこを振り出しに各地の博物館を訪問し、カーライルを訪れるのは、16日目の2月26日で、その次の日にヘイドリアンズ・ウォールとヴィンドランダ、The Roman Army Museumを訪れた。

ヘイドリアンズ・ウォールを歩く

朝、カーライルの駅より、鉄道でニューキャッスルへ向かって三つ目の駅、ハルトウィスルへ向かう。そこから1/25000の地図を頼りにヘイドリアンズ・ウォールを目指す。地図上では約5km程で、多少のアップダウンは覚悟で出発する。しかし、実際に歩いてみると地図上の等高線よりアップダウンをかなり厳しく感じる。後で地図を再確認すると、ウォールに着くまでに標高約110m地点からおおよそ220m付近まで登り、また170m付近まで下っている。

ハルトウィスルの町中を過ぎてからは誰とも遭遇せず、会うのは道沿いの牧場に放されている羊ばかり。その羊も時々見慣れない人間が来たと警戒するのか、こちらを見て1頭が鳴く、すると連鎖反应的にその鳴き声が伝わり、そしてこちらの方へ一斉に頭を向けてくる。何とも

変な気分である。

何とかウォールまでたどり着くことができたが、これまで歩いてきた道を思い出して地図上のウォールのある地形を見るとウォール沿いに歩くかどうか少し迷う、が覚悟を決めて歩き始める。歩き始めた地点が低い位置であったため初めは気がつかず、高い位置に登るまでわからなかったのだが、標高の高い位置にくと丘陵の端部に沿って東西に延びているウォールを望むことができる。なかなか壮観な眺めで、これが古代ローマの皇帝ハドリアヌスの命令によりAD120年代に築かれていたのかと想うと驚きがこみ上げてくる。

今回歩いたところでの最高所は標高約320mで、そこから北側のスコットランド側を望むとウォールがある所との高さの差が約40m程あり、やはり征服できない異民族の侵入を防ぐための防壁であったことが実感できる。壁は現状では高さが1.3~1.5m程で幅が約1.0~1.3mであるが、発掘調査などにより、築かれた当初は高さ約6.6m幅約3mのウォールであったと想定されている。そして1マイルごとにmilecastle(監視所)が置かれ、その間に2箇所のturret(小監視所)が設置されていた。

ウォールに沿って歩いていくと当時のturret(小監視所)があり、これには復元想定図とともに英語・ドイツ語・フランス語・日本語で記した解説板がついている。日本語で解説を書く必要があるほど数多くの日本人が訪れるとは考えにくいのだが、やはりこれは遺跡を保存し、そして広く公開し活用しようとする姿勢のひとつの現れなのだろうと思う。

歩いていくとウォールに沿って道のあるところもあり、またそこに比較的新しい靴跡もあるのでこの冬の季節でも私と同じようにここを訪れる人がいたことがわかる。途中一般道と交差するところがありそこから下へおりて平坦な道を歩こうかと思ったが、そのまま歩くことにする。しかしこれは後で少し悔やむことになる。



ヘイドリアンズ・ウォール
途中にある監視所跡より東を望む

というのも地図上の等高線を読み間違えていたことから、考えていたより上り下りが急で、距離が長く、根を上げそうになる。

しかし、何とか歩き通し、次の目的地であるヴィンドランダと The Roman Army Museum へと続く古代ローマが敷設したローマン・ロードまで出ることができた。ここからの道は平坦で上り下りはないが距離が約5 kmある。道を歩いているとこんなところだと思うのだが数台の乗用車が私と同じ進行方向に横を通り越していく。これは後でわかるのだが、ヴィンドランダと The Roman Army Museum とへ行く車だった。

ローマン・ロードは地図上で見ると基本的には直線道路で、地形に制約されるところや方向を変える必要があるところでは曲がっているが、それ以外はだいたいまっすぐにつくられている。



ヘイドリアンズ・ウォールより南に下り、ローマン・ロードと交わるころより、東のヴィンドランダ方面を望む

ヴィンドランダと The Roman Army Museum

ヴィンドランダは、古代ローマ帝国が建設した軍隊の駐屯地とそれに付属する集落跡のひとつである。

ローマ帝国は、屈服せずたびたびローマが征服した地域に侵入してくる異民族（スコットランド人）に手を焼き、その侵入を防ぐためイギリスにおける征服地の最北部に築いた防壁がヘイドリアンズ・ウォールである。この防壁に沿ってローマン・ロードと軍隊の駐屯地、それに付属する集落が各地につくられた。ヴィンドランダはその駐屯地の一つで、ヘイドリアンズ・ウォールの南側にあり、ローマン・ロードに接して建設されている。

ヴィンドランダでは砦跡と Bath House や兵



ヴィンドランダを東南の丘陵上より望む

舎・住居跡などが発掘調査により明らかにされている。発掘調査後、保存整備がおこなわれて公開されており、調査は現在も続いている。砦は木と石でその一部が復元されており見張り台の上まで昇ることができる。



ヴィンドランダに復元された見張り台（北西より）



ヴィンドランダ
Bath House

公開されている各遺構は、どのくらいの頻度で清掃などがおこなわれているのかわからないが、状態は良く保たれている。遺跡の全体に芝生が貼られており、保存公開されている各遺構の礎石とマッチして良いものである。ただ、気になったのは一つの建物遺構を整備している(?) ところがあったのでしばらく見ていたのだが、どう見ても遺構を整備しているというよ

り建物の基礎を造り直しているという方が似合っているような作業状況である。



遺構を整備している様子

The Roman Army Museum はヴィンドランダに接してもうけられた博物館で、ヴィンドランダの下谷間にあり、ちょっと見たところでは郊外にある大きめの平屋の住居で一見すると博物館には見えない。入館料はヴィンドランダとセットになっている。中はかなり広く、ヴィンドランダから出土した資料を豊富に展示している。



The Roman Army Museum

特に目を引いた展示資料は、大量に出土している有機物の製品で、皮革製サンダル・木製櫛・布製の履き物・ウール製の衣服などがある。また、木製の Writing Tablets (日本でいえば木簡) も多数出土しており、そのような出土品の保存処理過程を写真などを交えながら展示解説をおこなっている。

展示をみると、ケースは小型の壁面ケース中心で、それを各コーナーに区分けし、例えば生活用具として日常の調理や食事に使う様々な用具や食器をケースごとに展示し、それを一つのコーナーとして当時の食生活と食事の状況を示

している。興味深いのは、ヴィンドランダがローマ軍の駐屯地として機能していた200～300年間ににおける出土資料を展示するのにも大英博物館やヴィクトリア&アルバート博物館でおこなわれているような同一の資料を多数展示して、その資料の形態の変化を示すとともに観覧者にインパクトを与えようとする展示手法がここでも見られることである。ただ少し違うのは、遺跡の範囲と時代が数百年間に限られることなどからそのような展示ができる資料は限られているということである。

照明を見ると部屋の中はやや暗くし、展示ケースとその中の資料を際立たせる工夫をしている。ケース内の光源は蛍光灯で、光源の前に熱きりガラスを置きケース内に熱ができる限り伝わらないようにしている。

野外には、博物館の外に流れている小川に沿ってローマ時代の神殿・集落の中にあった店舗・兵士の家などの復元建物がある。店舗・兵士の家ではその中での当時の生活を人形などを配置し再現しており、その前にあるスイッチを押すと会話を聞くこともできるようになっている。



The Roman Army Museum の野外に復元された神殿、店舗、兵士の家 (左より)

なお、ヴィンドランダに接して設けられた駐車場には多数の車が止まっており、冬の日であったが家族連れなどの人たちが数多く訪れていた。

この日の行程は、先に述べたようにカーライル駅より、鉄道でニューキャッスルへ向かって三つ目の駅、ハルトウィスルから午前9時頃出発し、ヘイドリアンズ・ウオール、ヴィンドランダと The Roman Army Museum を経由して四つ目の駅バードン・ミールに午後4時30分頃到着した。地図上で見ると行程はおよそ20kmになる。

体感の伝承～博物館での「茶」～

佃 一 輝

博物館学の実習に「茶」についての講座を提唱開設されたのは末永雅雄先生であった。博物館、美術館が、日本の芸術文化を対象とする限り「茶」についての一応の心得は、知っておくべきであるとお考えであったかと思われる。茶室での所作、飲み方、食べ方といった作法ひと通りを体験することが課せられたのである。

開講当時の昭和三十年代、四十年代において、「茶」は伝統文化であるとともに、現に社会生活に重要に機能していた。日常の場は和室座敷であったし、接客にも煎茶や薄茶が用いられることが常であった。菓子はどう取り、茶碗にどう口をつけるかは「常識」の範疇とされていたのである。もっともこの「常識」は、ひとつの「教養」をあらわすもので、誰でもが知っているというものでもない。茶を出されて、あるいは茶室に通されて、ひと通りの所作を行うことが出来ることは「教養人」としての最低条件であり、「教養人」としての「常識」であるという了解が社会一般に成り立っていたのである。博物館学に「茶」の実習体験を取り入れることは、少なくとも博物館にかかわる学生には、「教養人としての切符」を与えるという、当時の教育理想がかい間見られようか。

それはまた実学的発想であったかも知れない。実際、絵画や書（軸、巻物、画冊、屏風等）、茶道具といった「茶」に直接係わるもののほか、各種の文物、美術品の多くは個人が蒐集家蔵しておられることが多かった。これらに接するの

には、その居宅を訪問するしかなく、ここで茶の心得は必須であった。所蔵者にとって、訪問者が「教養人」たる資格を持つ者か否か、文物を手にとる資格があるかどうかの判断材料は、会話と茶の心得、所作によるところが多であったからである。博物館学という「物」を扱い対象とする学において、「茶」は「学の資格」をも問うという通念があったのである。そうした社会の中で「茶」が実習の中にとりあげられたのであった。「茶」を知ることは、学問と実社会を繋げ、翻って学を高める便（よすが）ともなっていたのである。

今日、生活社交の場に「茶」の占める位置は大きく様変わりしている。すでに接客に用いられるのはコーヒーであり、場所は洋間であり、しかも個人の居宅であることは稀となった。「茶」の心得を持つことが「教養人」であることの証しと考える人は少なくなり、まして「教養」そのものが魅力とされなくなっている。「茶」文化は、すでに日本の主要な生活文化の位置を失いつつある。だが、にもかかわらず、或はそれ故にこそ「茶」を博物館学に取り上げる必要は、むしろ高まっているのではないか。

十年ほど前の和室での講義に、「足をくずして楽に座って」と話しかけた。中にひとり、突然、体育館でするように畳上で足を山折りして座った学生がいた。その時の他の学生たちの、なんとも困惑した顔が忘れられない。私としてもどう云うべきか、躊躇して、何か気恥ずかしくて、結局何も云わなかった。だがこの数年、この体育館座り（おにぎりすわりとも云うそうだ）派が三分の一を超えるようになった。私もまた「正座」でなく、畳上の「安座」の仕方から教えることを当たり前とするようになってしまった。「荷物をまとめて置いて」と云えば、整然と床の間に並べてくれたりするのにも、もはや驚かなくなった。「茶」が「教養人としての常識」であったころは、床の間に上らず、畳の縁（へり）を踏まず、また安座の仕方も「日本人の常識」であって、とりたてて述べるほど



茶室での実習風景1

もなく日常そのものであった。そしてそのほかに「茶」があったのである。しかし、畳のある家は影をひそめ、床があっても物置でしかない空間では、急速に生活文化は変化している。和室は、生活空間でなく特殊の劇場空間になりつつあるのであろう。しかし「茶」文化を考えると、和室の中でも茶室は、日常生活の空間ではない。「け」と「はれ」を云うなら「はれ」の場である。床と同様に、家という「け」の場に仕掛けられた「はれ」の特殊空間であった。この特別の空間で多くの文化が育まれたことを、この際に思ってみるのも必要である。

日々に和室生活がなくなったからとはいえ、それで古典文化への興味が薄れたというのではない。むしろ日本文化を異文化のように感じ、頭腦的、客観的に対象化する人々は増えつつある。むしろ今「和」はトレンドであり流行である。それは、僅か十年前の生活の「常識」を「博物館」の陳列対象とし、歴史の検証対象として「興味あるもの」とするような視点で、まして「茶」は、ガラス越しに陳列された日本文化になったかのようである。だが、それ故に「茶」という「はれ」を用いて、博物館学での有効な教育成果が目指せるのではないか。和室や和の生活様式、和の生活感が希薄になればなるほど、伝習された日本の古典文物、美術への共鳴を、意図的にせよ高める工夫が求められると思われるからである。

「茶」の文化において培われた文物、美術品への愛情。「物」への徹底した美意識と愛情は、もっとも継承すべき「茶」文化のひとつであろう。「物」を審美し愛情をかけることを、心に育て、行為にあらわす方法が「茶」である。畳上で「物」を「手取り」する周到な方法。傷つけず、手に伝わる重さや嵩（かさ）を体感するのは、「物」を単なる資料価値以上のものとして認知する第一歩ではないか。軸を床に掛け、畳上正面に正座して見るとき、あるべき作品価値が正当に看取出来得るであろう。これらは、従来の茶の作法体験をこえて、「茶」文化が育ててきた美術芸術の鑑賞行為であり、何よりも「体感」を至上とする芸術行動そのものである。創作と創造者ばかりが芸術作品、芸術家ではなく、「体感」し、感動し、これを「茶」に用い、コーディネートする享受者も、また芸術家であ



茶室での実習風景 2

るとする伝統は、やはり多くの文化活動を生んだ。

茶人と数寄者、好事家とよばれる人々が日本の文化に大きな創造の活力を与えていることは否めまい。平安古筆、経巻、絵巻、曼荼羅、室町水墨画、禅僧墨蹟、南画、これらは生まれた時代に、それぞれの役割を果たし、しかもその後、「茶」の場において再評価、再検討、再使用して生まれ変わったものでもある。制作の意図や意欲とは別に、美の享受者が「物」への愛情と執着を積み上げた集積の結果であって、これを不純として退けるべきではあるまい。むしろこのような「茶」の考えと方法が、日本文化の享受史と鑑賞史の一翼であることを知っておくことは必要であろう。

そして何よりも、その美の享受が「体感」によりなされることが重要である。博物館学での資料の扱い方に、「体感」とそれによる愛情を持ち出すのは、いささか情動的に過ぎようが、それもまた伝承すべき「茶」の文化であり方法であった。学の根幹には「心得」とでもいうべき、対象への精神のありようと、それを具体化し、身体行為で表す「体現」が求められることには違いがない。「物」によって考究することを学ぶ博物館学であってみれば、近代学問の方法論以前に纏められた「茶」の文化、いわば「物」への肉薄のメソッドを知ることを避けるべきではあるまい。ましてそのような愛情の集積による文物コレクションを前にするときは尚更に思いをいたさねばなるまい。

博物館学の実習に「茶」のあることは、作法体験といったばかりでなく、「体感」をもとにして「物」に導かれ積み重ねられる文化の重みを、これも「体感」して、基礎とするためでありたい。

博物館だより

◇平成15年度関西大学博物館 開館日数・入館者数（入館者数は3月25日現在）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	25	23	19	23	3	8	18	18	13	14	13	14	191
入館者数	810	1,497	226	1,501	633	177	669	1,052	123	106	107	196	7,097

◇平成15年度考古学入門講座「壁画の世界—古墳から寺院まで—」の開催

平成15年11月1日（土）～29日（土）まで、毎土曜日全5回の講座を行い、のべ1,396名の受講者がありました。講座の内容と講師は次のとおりです。

第1回「装飾古墳と壁画古墳」	関西大学名誉教授	網干 善教
第2回「中国西域の壁画」	関西大学文学部教授	米田 文孝
第3回「中国唐代の壁画」	奈良文化女子短期大学助教授	来村多加史
第4回「高句麗の壁画」	大阪市文化財協会	高橋 工
第5回「日本の佛教壁画」	関西大学文学部教授	山岡 泰造



考古学入門講座 風景

◇平成15年度購入資料について

博物館所蔵資料充実のために資料を計画的に購入しています。今年度は中国陶磁器を3点購入しました。



五彩羅漢図皿



三彩刻花芍薬文双耳壺



白掻き落し牡丹文陶枕

◇関西大学博物館開設10周年記念事業について

関西大学博物館は平成16年に開設10周年を迎えます。それに伴い、平成16年度の企画展は開設10周年記念企画展として本館の所蔵する名品の数々を展示いたします。これまでの重要文化財指定の考古学資料に加え、本館が幅広く収集してきた資料の名品を、この機会にぜひご高覧ください。

・関西大学博物館開設10周年記念 平成16年度企画展「関西大学博物館の名品」

開催期間：平成16年4月5日（月）～5月15日（土）10：00～16：00 月曜～土曜開館（日・祝日閉館）

入館料：無料

・記念講演会「関西大学博物館、考古学資料について」

日時：平成16年5月8日（土）14：00～

会場：関西大学千里山キャンパス 尚文館マルチメディアA V教室

講師：関西大学名誉教授 網干善教

参加費：無料

編集後記

『阡陵』第48号をお届けいたします。今号は陶徳民教授、吹田浩教授、米田文孝教授、黒田一充助教授の各先生方と、大阪市文化財協会の文珠省三氏、一茶庵宗匠の佃一輝氏に玉稿をいただきました。ご執筆くださいました先生方に感謝申し上げます。

表紙は青花宝相華文梅瓶です。典型的な形の梅瓶で、釣鐘型の被せ蓋が欠損することなくともなっている貴重なものです。染付けで胴体全体に宝相華文が描かれ、明代初期の作と考えられます。関西大学博物館の平成14年度購入資料で、関西大学博物館開設10周年記念企画展にも出展いたします。